導入としては、サーブレシーブのように固定された状態から始める。考え方としては、トスの種は10くらいで、入り方等にアレンジを加えることで、パターンを広げる。

②相手選手が流れてクイックを打つような状況でのブロックはどのように行うのか？

予測がない限りはついていくことは不可能に近い。予測や読みを使って対応して行く。したがって、攻撃(スパイク)側が優勢である。

③初心者が打ち分けてスパイクを打つためのスイングの指導と練習法について？

コンビネーションの練習などで、打てないコースやできない動きを見出し、それを課題として取り出して練習し、動作を身につけていくことが必要である。したがって、スパイク練習には常にブロックをつけて行うことが必要。そうすることで、できなかった動作(プレー)ができるようになり、有能感を持たせることができる。

④リードブロックについて？

基本的には高身長者が使う技術のため、自分のような身長のセンターは動き方が重要になる。例えば、クイックへはコミットで跳んで、その後トス方向へ追いかけていくなどが必要となる。

つくばアカデミックフォーラム報告

～　つくば市・筑波大学が贈る「交流と教養」のひととき　～
「夢と魅力の溢れるまちづくりを　Sports, Art, Lifeの融合から?」

松田裕雄　都澤凡夫　中西康己（筑波大学）

今夏、2004年7月11日に行われました「2004東西インカレバレーボール男子王座決定戦inつくば」における「歓待・趣向」企画イベントのひとつとして、バレーボール学会の後援のもとに開催しました「つくばアカデミックフォーラム」の報告を致します。

このフォーラムは、「Sports for All, All for Sports 人へ、社会へ、そして次世代へ、普遍の魅力を・・・」「繋ぎのバレーで繋がる社会を！」いう理念に基づき、バレーボールを中心に「人が創る」魅力を多分野、多世代、多地域に向けて発信していこうとする「東西インカレ」という大学チャンピオンシップ内の一イベントとして企画されました。

これは，益々進む地域化、地方分権化の世相に対する「地学連携」（つくば市、筑波大学）の必要性とその実際の取り組みを市民に感知、認知してもらうという意図のもと、市と大学が贈る知的財産公開の場というイメージで行いました。以下がその主要目的になります。

1）産学官民一体化へのスタート（Sports,Art,Lifeのコラボーレーション）

2）つくば市のアイデンティティを知ってもらう（つくばは資源の宝庫）

3）夢多き教養を深めよう（市民、研究者、行政官、競技者の情報共有）

上記3つの目的に順じた企画・進行は、そのまま3つの大きな特色を持たせることでデザインしました。
1）に関して－　「産学官民」、「Sports, Art, Life」、この2つの軸からプレゼンターを選定し、都澤凡夫氏（筑波大学体育）、蓮見孝氏（同大学芸術）、渡和由氏（同大学芸術）、島袋典子氏（(有)インキュベーションラボ）、飯泉省三氏（つくば市企画調整）、中垣内祐一氏（堺ブレイザーズ）、以上6名で設定（6人制に掛けて）。
2）に関して－　上記6名を選定した理由は、各人は活動する分野は異なり、その「手段」や「アプローチ」は全く異なるが、活動の「本質」や「根幹」は同じということにあります。即ち、各々が自らの分野を他分野との相対的な位置づけを以って、非常に広いビジョンで捉えているということ（今回はそれが「まちづくり」という点で共通項になった）、裏を返せば、アイデンティティが確立されている方々である

ということでした。
3）に関して－　所謂「シンポジュウム」的に何か最後に大きな提言を出すのではなく、こんな世界になればいい、こんなものが創れればという夢を公にすることで、情報を共有することを根幹的な目的とした為、論点を小さく絞らずに、自由な気風を出し、プレゼンター同士の対話、そして来場者との対話という形式をとりました。しかし、一方ではコーディネーター（蓮見氏）を設定することで、大きな論の流転は創るという進行形式（5段階の区切り、5セットマッチに掛けて）で行いました。

さて、当日は入場者数約200人と、当初の想定を大幅に上回る人数でした。参加者層は、学生から地域振興市民団体の方々、スポンサー企業、市職員、一般父兄など、当初の狙いとしていた通りの多様な層となり、広報活動と連動した結果となりました。

実際のディベートについてです。中垣内氏は、スポーツとまち興業という観点から、大都市の中で地域感を社会的に教化しながら、一方では経済的なビジネスの視点も入れていかなくてはならない難しさ、しかしこれは宿命であるということを。都澤氏は、スポーツと教育という観点から、あらゆる分野からの総体としての「つくばアイデンティティ」の確立により、中都市「つくば」にしかできないことを追求。キーワードは「自然」「研究開発」「地学連携」「文化，芸術，スポーツ」、そしてその結晶としての「プロチーム」の存在を提起。渡氏は、生活とデザインという観点から、まちを構成する要素、「レジャー、医療、教育、芸術、音楽、健康等」がハードとしても一体化した施設を、TX（常磐新線、通称「つくばエクスプレス」）開通とともに、スポーツを中心として創る「つくばスポーツパーク構想」を提起。ここでは、いつでも、どこでも、誰もが、気軽に「元気に、幸せ」になれる空間と機会があることを指摘。飯泉氏は、生活向上と行政の観点から、地方分権下での、地域におけるあらゆる分野の協働制作が「まち」を創ることを述べ、まちの至る所、至る分野でこれが促進されやすい、しやすい環境づくりが「官」の最重要な役割であることを指摘。島袋氏は、多様な資源が「ある」だけではなく、それを生かし、それ以上の「ある」ものを磨いていく、付加価値をつける努力をし、もっと価値のあるもの、もっと輝けるものにしていくことで、産業も行政も財政も、そして結果として町全体が潤いを帯びる、こうした営みの中で地域力がついてくるということを指摘。

こうした展開の中で、一貫して流れていたものは、「魅力あるまち、人が住みたくなるまち、人が～したくなるようなまち」を創りたい、そして人が「幸せに、元気になれるような世界」にしたいということへの想いでした。これを異分野のプレゼンター同士、そして来場者が多角的に共感し、認識する瞬間が会場全体に創りだされていたといえます。

「東西インカレ」では、「繋ぎ」のスポーツ、バレーボールだからこそできることに挑戦しています。このような意味では、今回のフォーラムも、「本質」が同じであればどんな「手段」も「分野」も「繋がる」ということを証明するひとつの「生きた」、生の舞台でした（実際、ほぼ初対面でありながらプレゼンター同士の打ち合わせは一切ありませんでした。当日は隣人の話を聞き、それに感性のままに反応してもらうことで、逆に「論」が「繋がる」ことを期待しました）。「繋ぎ」のバレーボールで「繋がる」社会を！その一部がしっかりと担えた意義あるフォーラムであったと思います。

コーディネーターの蓮見氏は、フォーラム中に川端康成の著書「雪国」の冒頭を文字って、こう述べました。「つくばエクスプレスの長いトンネルを越えると、スポーツタウンの街だった。心のそこから楽しくなった。」こんな言葉が、このまちの「語り出し」になれる日がくればなあ・・・いうことを密かに夢描いています。

この度は、バレーボール学会にご後援依頼を快く受けていただき、本当にありがとうございました。深く感謝申し上げたいと存じます。今後ともバレーボール、スポーツ、そして社会の益々の発展のために相互に協働していければと考えます。